Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-04

残された二つの脱自的-地平的図式 : 一九二七年夏のハイデガー

片柳, 榮一

(Citation)
近代,82:151-168

(Issue Date)
1997-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001601

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001601

残された二つの脱自的－地平的図式

――一九二七年夏のハイデガー

片柳榮一

ハイデガーの主著「存在と時間」（一九二六年）の根本意図は、存在を時間から明らかにすること、つまり存在理解を可能にする意味として、現存在の時間性 Zeitlichkeit を剔抉し、この時間性によって可能とされる存在の企投を、時間性の超越論的地平 der transzendentale Horizont を通して明らかにすることである。しかしよく知られているようにこの試みは中断されたままになった。この小論では、この未完の図式の行方を探り、ハイデガーがさらされていた「心の頂き」[1]とでもいうものに思いを致してみたい。

I・時間性の脱自的－地平的図式

現存の「存在と時間」は次のような言葉で終わっている。「〝存在〟といったものは、存在理解（Seinsverständnis）のうちに開示されており、この存在理解は、理解として実存する現存在に属している。概念理解はされていないが、

先行する存在の開示性（Erschlossenheit）によって、現存在は実存する世界－内－存在として、内世界的に出会う存在するものに対して、また実存する自己自身に対して関わることが可能になるのである。存在の開示的理解は、現存在に適合した仕方でどのように可能なのであろうか。この問はその答を、存在を－理解する現存在の根源的な存在構制（Seinsverfassung）へ立ち戻ることによって得ることが出来るのであろうか。現存在の全体性の実存的－存在論的構制は時間性に基づいている。従って脱自的な時間性の根源的な時熟の仕方（Zeitigungsweise）そのものが、存在一般の脱自的企投を可能にしているのでなければならない。時間性のこの時熟の様態は如何に解釈されるべきであるのか。根源的な時間から存在の意味へ一つの道が通じているのであろうか。時間そのものが存在の地平として自ら開き示すのであろうか」（S.Z., S.577）。存在は存在理解として与えられており、[2] これがそもそも現存在に、世界の事物への、また自己自身への関わりを始めて可能にする。この存在理解を可能にしているものの究明は、この理解が属する現存在の根本構制を明らかにすることを通してである。そして「存在と時間」が示そうと試みてきたのは、この根本構制が時間性に基づくということであった。残された問題は、存在理解としての存在企投が、時間性によってどのように可能にされているかを、時間性の時熟の在り方に従って、一層立ち入って解明することである。しかしこの課題の前で「存在と時間」は中断されている。この中断は何に基づくのか。そのことがハイデガーのその後の思想展開を考える場合の最大の問題である。

ところでハイデガーは、この中断されることになった課題の一端を、一九二七年の夏学期の講義において、素描的に試みている。この夏学期の講義の題目は「現象学の根本諸問題」とされている。哲学史の四つの主要問題（カントの存在理解、本質と存在、思惟する存在をめぐる近世哲学の存在論、コプラをめぐる近世論理学の論議）をハイデガー独自の現象学的立場から批判的に解明したのち、これらの問題と一貫して連関する問題として、「存在と時間」の根

本問題である、存在理解を可能とする時間性の問題を取り上げる。そして「存在と時間」が予告したまま、中断されることになった課題に踏み込んで行く。それがこの講義の二十節「時間性とテンポラリテート」以下である。ハイデガーは、「存在と時間」において、時間性こそ、存在理解の可能性の条件であるとのテーゼを主張し、このことの解明に努めたのであるが、彼は時間性がこのように存在理解の可能性として働く場合に、この時間性を殊に「テンポラリテート」とラテン語風の言い回しで呼び、問題を浮かび上がらせるための工夫をする。[3] 二十節は「存在と時間」のおさらいであるが、問題は存在理解の可能性の条件としての時間性ということである。この命題を明らかにすることがこの二十節の課題である。

存在が存在理解においてのみ開示されているとすれば、存在への問とは、存在理解への問であり、存在理解は如何に可能とされるかという問である。我々が存在するもの Seiendes に関わる時、すでに存在理解の或る明るみのうちにおり、この明るみにおいてのみその関わりは可能になる。これらのものの理解としての企投は、存在理解へ向けられてのみなされうる。しかし内世界的事物と自己自身への関わりそのものを始めて可能にするものとしての存在理解は如何にしてなされうるのか。この理解としての企投は、何に向けてなされるのか。「我々は存在するものからその存在へとさらに進み、或いは戻りきたりするという課題の前に立っているだけではない。我々が存在理解そのものの可能性の条件について問う場合、存在を越えてさらに、それに向けて存在が存在として企投されているものを問うという課題の前に立っているのである。存在を越えて問うというのは、奇妙な企てと見えるかも知れない」(G.Ph., S. 399)。これに対してハイデガーは、プラトンが「国家」の有名な箇所で[4]「存在を越えて ἐπέκεινα τῆς οὐσίας」という言葉を語った問題状況を説明し、自分がプラトンの根本問題のうちを動いているとし、自らの試みが奇妙なものでなく、ギリシア以来の哲学の根本問題を問うているとする。つまりプラトンはこの表現で、存在するものの認識と存

在の認識を露開することとして照らしだすものが、存在の彼方に存することを理解していたとするのである。ハイデガーは、時間性が存在（存在理解）を可能にする条件であるという命題のうちに、プラトン、カント[5]が問うてきた根本問題を見ているのである。「存在するものと存在の認識との根本条件は、照明する光のうちに立つことである、比喩を用いず語れば、それは、我々が理解において理解されるべきものをそれへ向けて企投したものである。理解は、理解がそれに向けて企投するものを、露開されたものとして何らかの仕方で見ていなければならない…存在の理解は、明るみを与える、明きらかな地平の内をすでに動いているのである」（G.Ph., S.402）。

「存在と時間」の時期のハイデガーの思索の枠組みを根本的に規定しているのは、いわば「企投の序列」とも言えるものである。一九二七年夏学期の講義において次のようにこの序列が述べられている。「時間性の脱自的－地平的統一は、それ自身において端的な自己企投であるなら、そして脱自的なものとして、…への企投をそもそも可能にし、脱自に属する地平と共に企投の行方、超出先の可能性の条件をそもそも描出しているのであるとすれば、図式はそれとしてどこに向かって企投されているのか、さらにその先はと無限に問われることはできない。先にも言及した、相互にいわば前後層をなしているかのような企投の系列－存在物の理解、存在への企投、存在の理解、時間への企投－は、その終りを時間性の脱自的な統一の地平に持っている。ここではこのことをより根源的に論拠づけることはできない。そうしようとするなら時間の有限性の問題に入っていかざるをえなくなろう。この地平において時間の、つまり時間性の各々の脱自態は、その終わりを持っている。しかしこの終わりは、あらゆる企投の可能性のための始めであり、出発点である」（G.Ph., S437）。ハイデガーにとって時間性の自己企投は、企投の最後の頂であり、それ以上の、企投の向かう行方のない終極的な、自己企投なのである。それが彼の、時間を最後のものとする「有限」[6]の立場なのである。

ところでこの自己企投としての終極的な時間性は根源的に脱自的な性格を持っているが、しかしこの脱自は単に、或るものを越えるというだけの行く先の見えない、無への超出Entrückung ではない。脱自の各々は、脱自の行く先としての地平 Horizont を持っているとハイデガーは言う。「…への超出としてのそれぞれの脱自は、自らの内に同時に、そして脱自に属して、超出の何処へという形式的構造の先行的表示を持っている。我々はこの脱自の行方を地平と、より正確には脱自の地平的図式と呼ぶ」(G.Ph., S.429)。ハイデガーによれば、我々の存在理解が時間性によって可能にされる、つまり存在がそれに向けて企投されるというのは、より詳細な正確さをもって言えば、この脱自的ー地平的図式を介してなのである。「企投の序列」の終極とされたものが、そのうちに構造肢を持っている。終極的なものとしての脱自的な時間性とその地平的図式との関係、ハイデガーはこれを解きあかすためにこの時期苦心している。その説明の一つの試みが一九二七年の夏学期になされている。ハイデガーは時間性の一つである「現在」の脱自的ー地平的図式〝プレゼンツ〟を取り上げ、例示的な説明をなしている。

Ⅱ・現在の脱自的ー地平的図式としてのプレゼンツ

ハイデガーは、時間性の地平的図式の説明を、現在の地平としてのプレゼンツに限定する。それでなくとも把握しがたい時間性の現象への眼差しを余りに混乱させることのないためであるという。ハイデガーは時間性そのものとしての「現在」と地平的図式としてのプレゼンツとは異なるという。「現在、…の現前化を我々は時間性の脱自の一つとして特徴づけた。すでに〝プレゼンツ〟という名前が、現在や将来でもって考えるような脱自的現象を考えているのではないことを告げている。いずれにしても脱自的構造に関連しての時間性の脱自的現象を考えているのではない。

にもかかわらず現在とプレゼンツの間には偶然でない連関が存する。時間性の脱自は単なる‥への超出ではない。だから超出の方向がいわば無に向かって進んで行くのでも、無規定のままなのでもない。むしろ各々の脱自そのものに、脱自によって規定され、その固有の構造を始めて完成する地平が属しているのである」(G.Ph., S.435)。地平はそれ自身が脱自的構造をもつのでなく、脱自の向かう先を示し、行方であることによって脱自をいわば完成させるものなのである。時間性の現在が、本質的に、内世界的事物との出会いを現存在に可能ならしめる超越としての脱自であるとすれば、この脱自によって可能になった出会いの場としての世界を根本で規定している明るみがプレゼンツであり、この明るみのもとで存在は理解される。まさしくプレゼンツしているもの、現臨しているものが「存在する」ものなのである。「現在は、‥への超出として、出会い来るもののために開かれた存在である。そしてこの出会い来るものは、前もってプレゼンツに向けて理解されている。現前化において出会うものは全て、脱自においてすでに超出した地平としてのプレゼンツに基づいて、現臨するものとして、つまり現臨性 Anwesenheit に基づいて理解されている。(7) 手許存在性や手許不在性が、現臨性や離在性、つまり様々に変容した、また変容可能なプレゼンツを意味する限り、内世界的に出会われる存在物の存在はプレゼンツ的であり、それはつまり根本的に時間的に企投されているのである。したがって我々は、現在を時間性の脱自の根源的な地平的図式から理解しているのである」(G.Ph., S.436)。時間性としての現前化は、現存在が‥のもとでの存在として、内世界的事物に出会うことを可能にしているものであるというのが、「存在と時間」における基本的なハイデガーの主張を、「現在」に当てはめてみたものである。しかし如何にして可能としているのかという、いわば感性化を展開する直前で、「存在と時間」は中断されていた。この夏講義によれば、内世界的事物は、予めその存在を現臨性として理解されたうえで、出会われているのであり、この現臨性という存在理解は、プレゼンツという、現在の時間性の地平的図式のもとでなされているのであり、この存在理解の企

投は、プレゼンツに向けてなされているという。つまり内世界的事物の存在は、プレゼンツという時間性の図式に基づいて、ということはつまり、プレゼンツという方向に企投され、その企投されたもの、つまり存在が予め現臨性として理解されているというのである。

Ⅲ・残された二つの脱自的－地平的図式

ハイデガーは一九二七年夏の講義の中で、いわば例示的に、内世界的に出会われる事物の存在が、時間性の現在の、脱自的－地平的図式としてのプレゼンツに向けて企投されることにより、現臨性として予め理解され、それによって始めて現存在にとって、事物との出会いが可能とされることを示した。しかし時間性の図式はプレゼンツだけではないはずである。時間性のさらにあとの二つ、自己到来としての将来、既往性としての過去の地平図式はどうなるのか。ハイデガーはこの夏学期の講義では、それについて一言も触れていない。時間性の現在の脱自的－地平的図式が、誤解を避けるためにわざわざラテン語風の表現でプレゼンツと呼ばれたとすれば、他の二つの呼び名に関しては、将来の図式はフートゥルム（Futurum）、過去の図式はプレテリトゥム（Praeteritum）と呼ばれるであろうとの推測はなされうる。[8] しかし問題はその実質であり、内容である。

我々は先に「存在と時間」では、ハイデガーはこの地平的図式を立ち入って展開していないと述べたが、確かに詳細な展開はなされておらず、またプレゼンツといった言葉を用いての記述はないが、地平的図式そのものには言及している。それは六十九節の「時間性と世界の超越」と題する箇所においてである。

一九二七年夏学期の講義において、世界の超越が問題とされた中で、地平的図式が問題にされたのと丁度同じよう

に、「存在と時間」においても世界の超越との関連で、図式が問題にされる。「世界の可能性の実存論的—時間的な条件は、脱自的統一としての時間性が地平というようなものを持っているといるということのうちに存する。脱自態は単に：へのということではない。むしろ脱自態に、超出の「何処へ」ということが属しているのである。脱自態のこの何処へを我々は、地平的図式と名付ける。脱自的な図式は三つの脱自態の各々において異なる」(S.Z., S.482)。ここまでの記述は、講義とほとんど同じである。問題はこれに続く箇所の表現である。講義のより詳細な記述から推測すると、この「存在と時間」の記述の方がむしろ〝草稿〟なのであろう。「現存在が本来的にしろ、非本来的にしろ、その内で到来（将来）的に自己に到来する図式とは、「自らの為に das Umwillen seiner」ということである。現存在が自らそのものに、被投的なものとして情態性において開示される図式を我々は、被投性が直面するもの、das Wovor der Geworfenheit 乃至は譲り渡された在り方の譲り渡され先 Woran der Überlassenheit として把握する。これこそが既往性の地平的構造を特色づけるものである。自らのために実存しつつ、被投されたものとして自ら自身に譲り渡されて、現存在は：のもとでの存在として、同時に現前化しつつある。現在の地平的図式は、「の為に das Um-zu」によって規定される」(S.Z., S.483)。ここには、講義のプレゼンツのような、図式への時間的な命名はない。しかし図式によってハイデガーが何を実質として考えていたかは暗示されている。ハイデガーによれば、事実的現存在が本質的に開示されているのは、この地平のもとにおいてであるという。「事実的に実存する存在者がそれに基づいて本質的に開示されているものを規定しているのは、全体の時間性の地平である。事実的な現—存在と共に、その都度の到来の地平に、その都度、存在可能が企投されている。既往性の地平に「既に存する」ということが開示されており、現在の地平に、顧慮されたものが見いだされている。脱自の図式の地平的統一が、「の為という連関 Um-zu-Bezüge」と「自らの為に Um-willen」との根源的な関連を可能にしている」(S.Z., S.485)。この〝草稿〟を

もとに、残された図式の行方を探る試みを為さねばならないのであるが、その前にもう少し地平ということの理解を深めておく必要がある。地平ということで何が考えられているのかがそれほど明瞭ではないからである。

ハイデガー自身、地平に関する誤解を耳にしたのか、一九二八年夏学期の講義において、この地平ということについての誤解を正そうと努めている。そしてこの表現がもたらす誤解をさけるべく、次のような示唆をなしている。「脱自の地平的性格ということで何が考えられているのか。地平―この言葉で我々は視野の圏域を理解している。しかしギリシア語の ὁρίζειν からする地平 Horizont は、第一義的には眼差しや観に関わっているのではない。そうではなく、単純にそれ自体として限定するもの、取り囲むもの、包囲を意味する。そして脱自は決して、知識や意識や、ましてや観ではない。こう言おう。各々の脱自は自己自身を取り囲んでいる、しかもまさに脱自 ἔκστασις としてである。人は、逆であろうと考えるかも知れない。つまり超出は、なんといってもまさしく、あらゆる枠を飛び越えることだと。確かにそうだ。待つ Gewärtigen ということそれ自身には、何も特定されたものはない。待つということから、何が期待され、どのように期待されるかを決定することは、それ自身ではできない。しかしそれでも超出はそれ自身として何ものかを自らに、前もって与える。まさしく将来的なものそのもの、将来性一般、可能性そのものをである。脱自はそれ自身から或る特定の可能的なものを創りだしはしない。しかしそのうちで特定の可能的なものが期待されうる、可能性一般の地平を創るのである」(M.L.,S. 270)。ハイデガーが繰り返し述べているように、我々は脱自ということで、事物を越えることを考える。そのポイントは超出ということにあり、枠を越えることとして考える。しかしハイデガーはそれだけではまだ足りないという。脱自は超出として越えてゆくものであるが、その先が何ものとも定められない、いわば無に超出するのではない。特定のものではないが、或る行き先のいわば図像(具体的経験的感性的なものでない!)が存しているのであり、それが地平的図式ということであるという。「図

式」という言葉をハイデガーは明らかにカント的意味で用いている。カントによれば、「或る概念にその図像を創り出すための、想像力の一般的な運用に関する表象」(K.R.V., A140) が概念の図式であるという。全く異質な悟性概念と感性的現象が、そこで結び合わされる第三のものである。ここでは概念に対応するのは時間性であり、時間性の脱自のいわば図像がここで問題なのである。ハイデガーは待つ (Gewärtigen) という事態で説明する。彼によればこれは「時間についての意識の様態なのではなく、根源的、本来的な意味で時間そのものである」(M.L., S.263)。これは何か特定のものを待つということではない。しかし根源的な時間性として、このものは、特定の可能なものでなく、可能的なもの一般、可能性そのものを前もって与えているのであるという。ハイデガーによれば、時間性と地平的図式の関係はこのようであるという。つまり時間性の将来に関して言えば、その地平とは、そもそも可能性と言えるもの一般なのであり、この根源的な開けそのものが地平ということで考えられているのである。彼は脱自と地平の関係をギリシア語の造語法から説明する。「地平は脱自の内で、脱自と共に時熟する。地平はエクステーマである (丁度 *σύστασις* に対して *σύστημα* が、*σύνθεσις* に対して *σύνθημα* が造られるようにである)」(M.L., S.269)。ダステュールはこれを、ギリシア語に由来するノエシスに対するノエマの関係であると注解し、現象学の志向性の問題に対応するものであり、ハイデガーはしかも内在でなく、超越を問題にしながら、超越エクスタシスそのものに含まれた対象、行方としてのエクステーマを考えているとしている。(9) この指摘はハイデガーの地平を理解するうえで貴重な示唆を与えてくれるように思える。脱自が現存在の根源的に動的な構造を言い表しているとすれば、地平はその脱自の働く場、その開けとでもいうものを示していると言えよう。そしてハイデガーによれば時間性「将来」の地平は、可能性そのものであるという。特定の可能なるものが問題なのでなく、そもそも端的に可能性なるものそのものが問題になるのが、この地平的図式であるという。そして一九二七年夏学期の講義のプレゼンツの説明からすると、

内世界的に出会われる事物は予め、プレゼンツという時間性の図式に基づいた現臨性という存在の明るみのもとで理解されているという。だとすると、「現在」の図式は、事物の存在の現実性に関わるのであり、事物が現実に存在するとは如何なることであるかが、時間性の図式〝プレゼンツ〟に従って理解されているということを示すことが、目指されていたと言えよう。するとハイデガーが時間性の脱自的－地平的図式ということで問題にしようとしていたのは、カントが様相のカテゴリーとして、可能性、現実性、必然性の本質を問題にしたのに対応して、この問題をさらに根源的に問い直すことであったと推測され得よう。

ハイデガーによれば、カント以前の形而上学における様相の取扱いが、論理的解明であったのに対し、カントはこれを退けた、つまり存在をもはや単なる思惟から規定することを止めたという。そして対象を可能にする条件への、人間の認識能力の関係から、これを規定しようとしたと言う。つまり可能性とはもはや無矛盾性ではなく、経験を可能にする形式的条件（時間、空間）に合致するものであり、現実性とは思惟可能性という意味の可能性を補完するものということではなく、経験の内容的条件（知覚）に関連するものなのである（F.D., 243)。カントの「存在」に関する有名なテーゼ「存在とは、或る事物の、或いはそれ自身の或る種の規定の単なる措定 Position である」ということで考えられているのは、「存在」が対象の事象性に関わる述語ではなく、存在の様相という規定であり、このようなものとして措定なのだということである（K.Th.S., 467)。「存在はいかなる事象的述語でもないが、それでも述語であり、客体に対して語られるのであるが、しかし客体の事象的内容に関して何かが聞き取られるのではないのであるから、様相の存在述語は客体に由来するものではありえず、むしろ措定の本質としてその由来を主観性のうちにもつのである」（K.Th.S.,S. 469)。この様相の問題においてカント哲学の核心、対象の対象性の主観性からの由来という問題が最も明瞭になるのである。「それら（様相の原則）は対象の、客体の事象性を総合するのではなく、最初

の三つの原則によって規定された、対象の全体的本性を、つまり主体と、主観的－思惟的な表象の主観的在り方への可能な関係のうちでの対象の全的本性を定めるのである。様相は対象の概念に、対象の我々の認識能力への関係を付加するのである（A234, B286）」（F.D., S.243）。このカントの問題は、ハイデガーの理解からすれば、手前存在としての対象の事象性そのものを問題にするのでなく、その対象が我々に出会う場としての世界を構成する超越そのものが問題になるところ、その超越を可能としている時間性のエクステーマ的開けを問題にすることなのである。そしてハイデガーにおいては、可能性、現実性、必然性は確かに対象の或る種の存在規定であるが、それは「世界－内－存在」としての現存在全体に関わる存在規定であり、世界と存在の根源の有り様に関わる規定なのである。そのような存在の根源的規定として、可能性、現実性、必然性という存在の様相の問題を、カントよりさらに根源に遡って問題にしようとするのが、脱自的－地平的図式の問題なのである。

このような理解に立って、残された二つの地平図式としてどのようなことが考えられていたのかを探ってみよう。

時間性の将来は、現存在が自己に到来し、的中することを可能にするものである。「存在と時間」においてはその脱自的地平は、「自らの為に」であるとされた。これは勿論エゴイズムとは何の関係もない。一九二八年の夏講義では、その地平とは「可能性そのもの」であると言われた。「自らの為に」と「可能性そのもの」との本質的連関は明らかであろう。現存在は常に「自らに先だって」あり、常に自らの最も固有な存在可能へと自己企投している。この可能性は中立無関心的なものでなく、「自己への到来」という構造を持ち、それを目指している。その脱自の行方は「自らの為に」であるというのである。そしてここでの自己とは、内世界的事物との類似から理解された一つの事物ではない。「世界－内－存在」に開示された「世界」全体の究極の在処である。ハイデガーによればこの全体が根源的に開示された在り方は「先駆的覚悟性」であるという。この覚悟性は、人間の一つの心理情態を言い表すものでな

く、根源性があらわになった開示の明るみである。時間性としての将来が、自己への到来として、この場への脱自を可能とする根拠を示すとすれば、脱自の「何処へ」としての地平図式は、まさしくこの場そのものの開示であり、その根源的明るみを指していよう。しかもこの将来の地平は通常隠されている。我々はまさしくこの地平から逃れている。この地平の開示は、「終わりへの存在」としての自己の無性が、先駆性において徹底して純粋に担われ、この地平の本質としての可能性においてくまなく透明にされ、その無が自らの立つ場を貫くことによってのみ可能なのである。いつも「未だ…来ていない」未来として先送りされている終わりに、先駆することにより直面し、終わりを外にでなく、直中にした全体の明るみに到ること、そこに立ち尽くすことへの招き、それが「自らの為に」という脱自的地平であろう。ここでは、可能性において保持され、純粋化された終わりとしての無の直中での明るみが正面から問題になろう。

既往性の脱自的地平は、被投性が直面するもの、現存在の譲り渡された在り方の譲り渡され先と言われ、これは情態性のうちで開示されるのである。それは我々が現に立つ場そのものである。それが被投的なものとして、つまりいつもすでに投げ出されたものとして、不気味さの不安のうちで開示されるのである。一九二五年から二六年に至る冬学期の講義の中でハイデガーは、次のように述べている。「「先立ち Vorweg」という表現は、待つこと Gewärtigen を告知している。「のもとでの存在 Sein-bei」は、現前化、保持を告知する。では「既に das Schon」は何を告知するのか。それは、現存在のあらゆる時と存在の事実性にあてはまる時間的な規定である。「既に」は事実性 Faktizität のアプリオリを示すものである」(L.F.W., S414)。既往性の地平が関わるのは剥きだしの「事実性」である。被投性とはまさしくこの事実性なのである。先にみたように、脱自的地平において問題になるのは、様相のカテゴリーであった。「将来」が可能性に、「現在」が現実性に関わるとすれば、過去としての「既往性」が関わるのは、必然性で

ある。カントは「現実的なものとの関連が経験の普遍的条件に従って規定されているものは必然的である」(A218)と述べ、「必然性の図式は、或る対象のあらゆる時間にわたる現存である」(A145)という。しかし現存在が関わる第三の地平図式が開くものは、偶然性を秘めたいわば盲目的必然性とも言えるものである。根拠と理由を欠いたままの裸の現実であり、しかも絶対的な拘束をもって現存在を釘付けにしている事実性である。この地平も通常我々から隠されている。我々は剥き出しの事実、不気味さの不安に耐えられないからである。「しかし本来的に不安が立ち現れうるのは、覚悟した現存在においてのみである」(S.Z., S.456)。ここでもこの地平があらわになるのは、卓越した「開示性」としての先駆的覚悟性においてのみである。この開示性においてこの図式の示す地平は、現在の外の「過去」ではない。先駆的還帰によってこの地平に現れているのは、自らのよって立つ被投的〝現〟そのものの剥きだしの事実性である。そしてこの〝現〟は、自らそこに立つのであるが、その存在の根拠を自らのうちにもたず、唯投げ出されたものとして、いわば無の直中に漂い浮いているのである。言い換えれば根拠なき深淵的な〝場〟とも言えよう。ここにおいても「現」の場の根拠なき深淵が、無として顔を覗かせている。

一九二八年の夏講義においてハイデガーは将来的地平について、重要で示唆深い言葉を述べている。「時間性は第一義的には将来から時熟する。このことが意味するのは、時間性の脱時的全体と地平の統一は、第一義的には将来から規定されているということである。このことは、次のことの形而上学的表現である、つまり時間地平の脱自的全体性に根拠を持つ以外ではない世界は、第一義的には、「(自己の)為に」から時熟するということである。この「の為に」は意志の、自由の、つまり「超越して行く—自己自身に—向けて—在る transzendierendes Zu-sich-selbst-sein」ということの「の為に」である」(M.L., S.273)。「世界」はプレゼンツの地平においてのみ現れるのではない。第一義的には将来の「自らの為に」という地平に関わっている。そしてこの「自らの為に」とは「自由の為に」である

という。そしてこの時間の全体的地平に現れた「世界」と「無」のうちにハイデガーは深い関わりを見る。「世界は存在するものの何ものでもないという意味では、世界は無である。存在するものの何ものでもないがしかし、有る（was es gibt）ものの何かである。存在するものの何ものでもないものを与えるところの「それ」は、それ自身存在しているのではない。そうではなく時熟する時間性である。この脱自的な統一としての時間性が時熟させるものが、その地平の統一、つまり世界である。世界は、根源的に時熟する無であり、時熟と共に、そのうちで湧出するものそのものである。だから我々はこれを nihil originarium と呼ぶ」（M.L., S.272）。この「根源的な無」としての「世界」は、我々が残された二つの脱自的－地平的図式から推測した場と重なるものであろう。

Ⅳ・中断へのハイデガー自身の批判的回顧

ハイデガーは一九二八年夏講義の後には、地平的図式について語らなくなる。その中断の原因をこの図式の内容の乏しさに見る人もいる。[10] しかし内容の豊かさは我々の試みからも覗見されよう。ハイデガー自身が「哲学への寄与」で述べていることが、この沈黙への示唆を与えているように思われる。彼はその二六二節において「存在と時間」の試みを批判的に回顧している。「有の真性を経験する（思惟する er-denken）ことの必然性の内部においても、何故さしあたり我々はなお見たところ、表象に即したものの内を im Vor-stellungsmäßigen 動いているのかということの理由はここにある。我々は「存在論的なもの」を「存在的なもの」の条件として把握しているが、存在的なものへの付加としてとらえており、「存在論的なもの」（存在するもの Seiendes の存在性 Seiendheit への企投）をもう一度自身に自己適用として繰り返している。つまり有としての存在性の真性への企投を繰り返しているのである。形而

上学の視圏からやって来て、存在への問を課題として理解させるには、さしあたり他に道はない」(B.Ph.,S.450)。ハイデガーは「存在と時間」で自ら試みた「存在するものの存在の時間性へ向けての企投」を有の企投ではなく、存在性の企投であったととらえ、存在するものの存在性への企投の繰り返しでしかなかったと批判する。先にも触れた「企投の序列」の問題である。そして存在(性)の時間性(真性)への企投という考え方そのものが、存在するものの存在への企投という根本的な構造の繰り返しであって、それを繰り返すかぎり、存在 Sein と言っても、そこで存在するもの Seiendes の最も普遍的で最高の存在性 Seiendheit が表象の次元で考えられざるをえなくなるというのであろう。結局有 Seyn が対象とされてしまうというのである。それは地平図式が問題にする、措定としての存在の様相という捉え方が、超越論的反省 transzendentale Reflexion としてなお「存在と思惟」という形而上学の枠組みの中での試みであったとの自己批判であろう(K.Th., S473ff)。「だから問題だったのは、当初そのように構想せざるをえなかった存在への問の危機を、決定的な地点で克服すること、とりわけ有 Seyn の対象化を回避することであった。それは一方での有の〝時間的(テンポラール)〟な解釈を「差し控える Zurückhalten」ことを通して、他方で有の真性をこうした解釈からは独立して明らかにする試みを通してなされたのである」(B.Ph., S.451)。ハイデガーは、存在するものの存在を時間性に企投して開かれる脱自的地平という考えがなお、「有」を対象化する危険をはらんでいるという。しかし脱自的地平において明瞭になってきた、現存在を貫く nihil originarium の明るみから目を逸らして行くのではない。この無を含んだ明るみが「自己覆蔵のための開け die Lichtung für das Sichverbergen」(B.Ph., S.356)として捉え直され、カント的な〝思惟〟の次元から〝性起〟の次元への渾身の飛躍がなされていくのである。

注

(1) リルケの後期の詩「Ausgesetzt auf den Bergen des Herzens」参照。
R.M.Rilke, Sämtliche Werke, Bd.II, S.94f.

(2) 「存在は存在理解において開示される」という命題は、ハイデガーにおける「存在」を理解するために、殊に「存在」を「存在するもの」と混同しないために、根本的に重要な意味を持つ。なお「存在と時間」における存在理解という概念が二義性をもっていたとして「哲学への寄与」では批判的に回顧されている。一方で、形而上学的に後ろを振り返りながら、超越論的なものの根拠づけられていない根拠として把握され、他方、真性の本性の根拠づけを示すものとして後の考えに通じるものとしてである。
cf.M.Heidegger, Beiträge zur Philosophie, Frankfurt/Main 1989, S.435

(3) M.Heidegger, Die Grundprobleme der Phänomenologie (Gesamtausgabe Bd.24), Frankfurt/Main 1975, S.389

(4) Platon, Politeia 509b9

(5) ハイデガーは「時間性」が存在理解の「可能性の条件」であると述べて、カント的な思考の枠組みとの近さを示している。
M.Heidegger, ibid., S.389

(6) カントにおいて、認識の有限性が、本質的に感性的で受動的な直観に依存せざるをえない人間の認識能力に由来するものと考えられているとハイデガーは解しているように、ハイデガーにおいては有限性は受動性、被投性と深く結びついている。cf. M.Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik, Frankfurt/Main 1975, S.25

(7) Anwesenheit という概念はハイデガーにとって、ギリシア以来の形而上学において「存在」への唯一の通路となったものとして、きわめて重要な、しかも批判的な意義を持つものとなっていく。cf. M.Heidegger, Beiträge zur Philosophie, Frankfurt/Main 1989, S.191ff.

(8) F. Dastur, The ekstatico-horizontal constitution of temporality, in: Martin Heidegger, Critical assessments, Edited by Ch.Macann, vol.Ⅳ London 1992, P.177

細川亮一「意味・真理・場所」創文社　一九九二年、二六〇頁

(9) F.Dastur, ibid., P.176

(10) 細川亮一　前掲書、二六〇頁

F.Dastur, ibid., P.177

省略記号

(S.Z.) M.Heidegger, Sein und Zeit (Gesamtausgabe Bd.2), Frankfurt / Main 1976.

(G.Ph.) M.Heidegger, Grundprobleme der Phänomenologie (Gesamtausgabe Bd.24), Frankfurt / Main 1975

(M.L.) M.Heidegger, Metaphysische Anfangsgründe der Logik (Gesamtausgabe Bd.26), Frankfurt / Main 1978

(B.Ph.) M.Heidegger, Beiträge zur Philosophie (Gesamtausgabe Bd.65), Frankfurt / Main 1989

(F.D.) M.Heidegger, Die Frage nach dem Ding (Gesamtausgabe Bd.41), Frankfurt / Main 1984

(K.Th.) M.Heidegger, Kants These über das Sein, in: Wegmarken (Gesamtausgabe Bd.9), Frankfurt / Main 1976

(L.F.W.) M.Heidegger, Logik-die Frage nach der Wahrheit (Gesamtausgabe Bd.21), Frankfurt / Main 1976

(K.R.V.) I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, Hamburg 1956